



日本地球化学会ニュース

No.186 August 2006

Contents

2006年度日本地球化学会年会のお知らせ ⁽³⁾	2
2006年度日本地球化学会年会最終案内（会場地図）	
2006年度日本地球化学会公開講演会のお知らせ	
第1回地球化学会ショートコースのお知らせ	
学会からのお知らせ.....	5
年会に向けての新規入会における特別措置について	
GJ インパクトファクター最高値“0.913”	
2007年度女性科学者に明るい未来をの会「猿橋賞」候補者募集	
高校の選択地学の内容の検討について	
（日本地球惑星科学連合教育問題検討委員会から）	
学会評議員会議事録.....	7
2006年度第1回	
研究会などのお知らせ.....	11
金沢大21世紀 COE シンポジウム	
「東アジアの大気環境汚染と健康・生態系への影響」(9/23)	
2006年度日本地球化学若手シンポジウム(10/7~9)	
IGBP のコアプロジェクト	
人事公募.....	12
神戸大学理学部地球惑星科学科助教授・1名(8/31〆切)	
東京工業大学21世紀 COE プログラム「地球：人の住む惑星ができるまで」	
21世紀 COE 教員・1名(9/8〆切)	
東京大学大学院理学系研究科地球惑星科学専攻教授・1名(9/15〆切)	
院生による研究室紹介 No.3	14
東京大学大学院理学系研究科地殻化学実験施設 地球化学研究室	
女性研究者に聞く No.3	16
富山大学理学部生物圏環境科学科環境化学計測講座 助教授 張 勁	
書評.....	17
2006年度日本地球化学会年会プログラム.....	21

2006年度日本地球化学会年会のお知らせ(3)

主催 日本地球化学会

共催 日本化学会

後援 日本大学文理学部

会期 9月13日(水)～15日(金)

会場 日本大学文理学部

(東京都世田谷区桜上水3 25 40)

京王線・下高井戸駅・桜上水駅下車，東急世田谷線下高井戸駅下車 徒歩10分 (http://www.chs.nihon-u.ac.jp/index-con/info_f.html)

P3の地図を参照して下さい。

P3の地図を参照して下さい。

内容 一般講演(口頭発表及びポスター発表)，課題講演(口頭発表及びポスター発表)，夜間小集会，総会，学会賞受賞講演，懇親会。口頭発表は，A～Dの4会場(いずれも文理学部4号館)に分かれて行ないます。夜間小集会(9月13日)はC会場です。ポスター発表，総会，学会賞受賞講演は，文理学部百周年記念館で行ないます。

若手優秀ポスター賞 きわめて優れたポスター発表を行なった日本地球化学会学生会員に授与します(受賞者発表は懇親会の際に行ないます)。

一般講演発表分野 大気/降水・岩石/地殻・鉱床・有機物・生物・陸水・温泉/熱水・地球外物質・海洋・堆積物・環境・その他地球化学全般に関わる研究発表が行なわれます。

課題講演テーマ

課題講演 - 1 東アジア・太平洋域におけるエアロゾルと関連気体成分の地球化学

課題講演 - 2 環境地球化学の手法・新指標

課題講演 - 3 固体地球の脱ガスに係わる地球化学

課題講演 - 4 核・放射化学と宇宙・地球化学の接点

課題講演 - 5 地球化学の立場からみた新しい科学教育

口頭発表についてお願い 口頭発表時間は討論を含め15分です。講演を12分以内で終了し，3分の討論時間を残すようにして下さい。10分で第1鈴，12分で第2鈴，講演終了で第3鈴が鳴ります(なお，課題講演 - 1，- 2は討論を含め20分です)。液晶プロジェクター1台のみ使用可能です。各会場に，マイクロソフト社のPowerPoint 2003をインストールしたノートパソコン(OSはWindowsXP)を用意します。プロジェクター使用者は，上記システムにおいて実行可能な発表用ファイルをUSBメモリま

たはCD-Rに記録して持参し，発表されるセッションの開始1時間前までに，各会場の受付(会場内と同じパソコンを用意します)で動作を確認してファイルをお渡しください。2日目と3日目の朝一番のセッションで発表される方は，できるだけ前日のうちにファイルをご持参ください。なお，OHPを使用希望の方は，9月8日(金)までに年会事務局(nenkai2006loc@geochem.jp)にご相談ください。

ポスター発表についてお願い ボードのサイズは，縦90cm×横180cm(ベニヤ板を横向きにした大きさ)です。高さ90cmの脚(2本)がついているので，使用できる最大面積は180cm×180cmです。各パネルに発表番号を示します。掲示に用いる画鋲等は実行委員会で用意します。掲示時間は会期中3日間(初日朝から3日目昼まで)で，張り替えなしの予定です。初日の8:30頃から掲示できます。初日と2日目に1時間(13:00～14:00)のコアタイムがあります。ポスター番号が1P**の発表者は初日，2P**の発表者は2日目のコアタイムに必ず立ち会って説明を行なって下さい。その他の時間帯にも発表者がポスターに立ち会う予定がある場合は，その日時をポスターパネルに表示して下さい。ポスターは3日目の13:00までに必ず撤去して下さい。それ以後も掲示してあるポスターは，実行委員会が処分しますのでご注意ください。

参加申込 年会 web page から，指示に従って申し込んで下さい。予約申込は8月23日(水) 14時×切です。これ以後は，当日受付をご利用ください。

参加登録費(講演要旨集1部と送料を含む) 予約申込(年会 web page よりクレジットカードによるオンライン決済のみ): 主催・共催学会員5,000円，学生会員3,000円，会員外7,000円，会員外学生4,000円。当日受付(現金のみ): 主催・共催学会員6,000円，学生会員4,000円，会員外8,000円，会員外学生5,000円。

懇親会 9月14日 18時より，年会会場(学生食堂)にて。予約5,000円(学生3,000円)，当日6,000円(学生4,000円)。

講演要旨集(当日販売): 3,000円/部(郵送の場合: 3,500円/部)

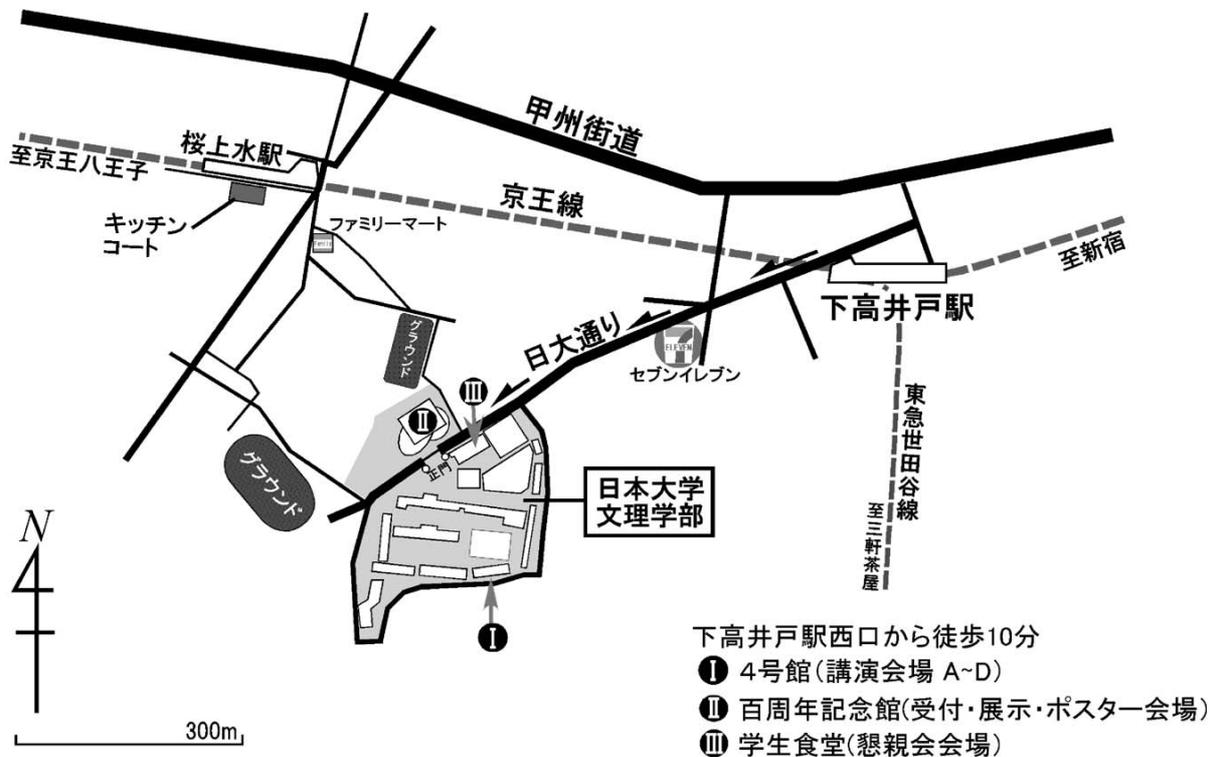
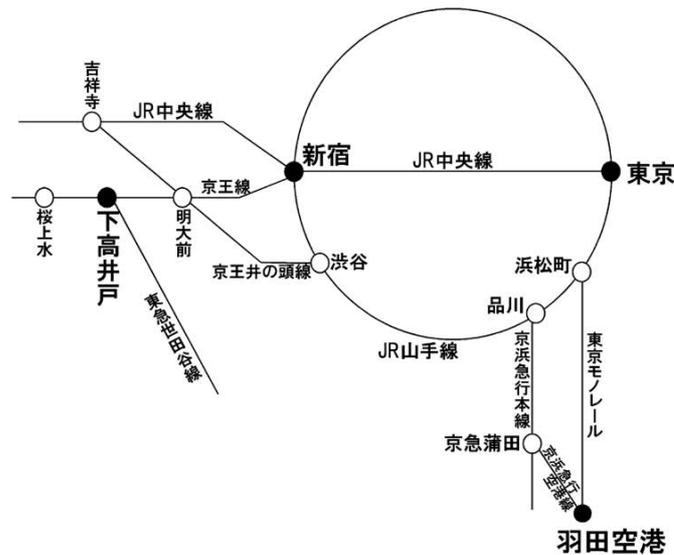
併設展示 関連機器メーカーその他による展示会を行ないます。展示会場は百周年記念館に設営します。多くの方々のご来場をお待ちしております。

その他 実行委員会では宿泊/航空券等の斡旋はいた

<日本大学文理学部学会会場へのアクセス>

- 羽田空港 京浜急行空港線 → 京急蒲田 京浜急行本線 → 品川 JR山手線 → 新宿 (所要時間 約60分)
- 羽田空港 東京モノレール → 浜松町 JR山手線 → 新宿 (所要時間 約60分)
- 新宿 京王線 (普通または快速) → 下高井戸 (所要時間 約10分) → 徒歩10分 → 学会会場

(上記の所要時間はあくまで目安で、乗り換えに要する時間は含みません。朝夕のラッシュアワーにはさらに時間がかかることがありますので、十分に時間の余裕をみてお越しください。)



しません。各自お早めの手配ください。

問合せ先

〒164 8639 中野区南台1 15 1
東京大学海洋研究所 海洋無機化学分野
蒲生俊敬
Tel : 03 5351 6451 , Fax : 03 5351 6452
E-mail : nenkai2006loc@geochem.jp
年会 web page :
<http://db1.wdc.jp.com/geochem/index.html>

2006年度日本地球化学会公開講演会のお知らせ

日本地球化学会では、年會に先立ち、下記のように市民向けの公開講演会を開催します。

テーマ：「深海底から地球の未来を求めて」
主催：日本地球化学会
日時：9月10日(日) 14:00~16:00
会場：日本大学文理学部百周年記念館
東京都世田谷区桜上水3 25 40
京王線・下高井戸駅・桜上水駅下車，東急世田谷線下高井戸駅下車 徒歩8分 (http://www.chs.nihon-u.ac.jp/index-con/info_f.html) アクセス方法については、P3の地図をご覧ください。
参加費：無料。どなたでもお気軽にご参加ください。
対象：中学・高校生を中心に小学校高学年から一般市民まで。

プログラム

1. 地球深部探査船「ちきゅう」が導く「地球」の新たな姿

徐 垣 (海洋研究開発機構高知コア研究所所長)

平成17年9月、その姿を横浜港大黒埠頭に表した地球深部探査船「ちきゅう」は、全長210m、高さ70.1m、ライザー掘削時において最大稼働水深2,500m、掘削全長10,000mの掘削能力を有する科学掘削を目的とする掘削船である。その掘削能力とともに、本船は「洋上研究所」と呼ばれるほど充実した研究機器と研究環境を有する。本講演では、この「ちきゅう」を使って、科学者が今後どのような研究を行うのか、また、この掘削船でどこまでの分析や解析が行えるのか等を紹介したい。

2. 深海底から地球を探る

川幡穂高 (東京大学大学院新領域創成科学研究科、海洋研究所教授)

日米欧が主導する国際プロジェクト「統合国際深海掘削計画 (IODP)」では、日本が開発した巨大深海掘削船「ちきゅう」等を利用して水深2,500m (最終的には4,000m) の深海底を掘削する。そこには、未知の地下生命圏が広がっていると推定され、堆積物の中には地球がこれまで経験してきた過去の気候・環境変動が沢山記録されている。また、日本周辺海域では、巨大地震の仕組みを理解するなどの地球変動メカニズムの解明が期待されている。さらに、新しい、そして未来エネルギーとして期待されるガス・ハイドレートの探索なども行なわれる。これらは地球・生命科学の創成とその統合的な理解に通じ、最終的に「新しい地球観」がもたらされる事が期待される。本講演では、IODPの現状と今後の展開を説明し、「地球の本質を知りたい」と感じる若者や市民の皆さんに新しい地球科学・地球生命科学の世界を知って頂く機会としたい。

問合せ先：

〒164 8639 東京都中野区南台1 15 1
東京大学海洋研究所
佐野有司
Tel : 03 5351 6823 , Fax : 03 5351 6824
E-mail : nenkai2006loc@geochem.jp

第1回地球化学会ショートコースのお知らせ

主旨：地球化学は、試料を構成する元素、同位体、化学種の存在度、分布、移動、変化を空間的・時間的に調べ、それらを支配する法則や原理を見いだすことにより、地球や惑星を構成する物質の構造や循環を調べる学問である。分析・データ解析技術の進歩により、試料から得られる地球化学的知見の質と量は飛躍的に向上し、今では、鉱物学、岩石学、地質学、地球物理学など、他の地球科学分野の発展を支える重要な学問となっている。

しかし最近では、地球化学の応用性・実用性のみが注目され、地球化学の本質である現象の素過程を調べる研究が少なくなるとともに、時間をかけてじっくり調べ、問題点を徹底的に掘り下げて理解する機会も減

少してきている。こうした問題に対し、日本地球化学会では地球化学講座の発行を通じて、地球化学の啓蒙を進め、成果をあげつつある。

さらに学会では、次なる啓蒙活動として、大学生・大学院生を対象とした「ショートコース」を、年会日程（平成18年9月13、14、15日）に合わせ、9月12日に開催する。本ショートコースでは、地球化学を研究する上で必須となる基礎知識の包括的修得と、最先端研究に触れることによる視点の拡大、という次の二つの目標を掲げ、将来の地球化学を担う若手研究者（大学生・大学院生）の育成を目指す。

1．2006年度プログラム（9月12日）

はじめに（13：00～13：10）

「誰も眠ってはならぬ」 平田岳史（東工大院）

講義1（13：10～14：30）

「同位体地球化学」 鈴木勝彦（JAMSTEC）

講義2（14：40～16：00）

「有機地球化学」 奈良岡 浩（岡山大学）

講義3（16：00～16：30）

「地球を見る」スライドショー

山本鋼志（名古屋大学）

講義4（16：40～18：00）

「地球温暖化」 野尻幸宏（環境研）

夕食（弁当支給）

講義5（18：30～20：00）

「プレゼンテーションはあなたの将来を決める」

松田卓也（神戸大学・名誉教授）

2．参加対象者

日本地球化学会一般会員・学生会員・非会員、誰でも参加できます。応募多数の場合は、お断りする場合がございます。

3．定員

50名（先着順）。9月4日を参加申込締切日としますが、定員になり次第、締め切らせて頂きます。

4．開催日時・場所

日時：日本地球化学会年会開催前日（9月12日、午後1時から夜8時頃まで）

場所：日本大学文理学部百周年記念館（年会会場と同じ。東京都世田谷区桜上水3-25-40。アクセス方法については、P3の地図をご覧ください。）

5．参加費

3,000円（講師謝金費、資料代、弁当代などを含む）。

日本地球化学会学生会員は学会からの補助により2,000円引。

6．申込み方法

下記の情報を、年会ショートコース受付（short-course2006@geochem.jp）までメールでお送り下さい。メールの件名は、「2006年ショートコース申込」として下さい。

氏名：

所属：

連絡先住所：

e-mail：

e-mail：（もう一度）

身分：日本地球化学会（ 印）

学生会員 一般会員 非会員

Phone：

Facsimile：

なお、セミナー会場、講演内容、講演時間については、変更になる場合があります。

担当：平田岳史（東工大院理工）

学会からのお知らせ

年会に向けての新規入会における特別措置について

通常の入会手続きでは、1)入会申し込み、2)事務局からの請求書の発送、3)会費の振り込み、4)会員登録、の手順を踏んでいます。

上記手順では、年会のために新規入会される場合「講演申し込み」時には「会員としてのメリット」を受けられなくなってしまいます。そこで、年会前に限り、1)入会申し込み、を受け付けた段階で会員割引の対象と致します。ただし、年会開催以前に会費を振り込んでいただくことを条件と致します。入金を確認できない場合には「非会員」としての取り扱いになります。念のために、振込書を年会時にご持参下さい。

修士課程の皆さんには2年間の会費7,000円という「修士バック」が用意されています。本年度の年会で発表する皆さん、特に修士課程の皆さんに新規入会していただけますよう、声掛けを宜しくお願いいたします。

GJ インパクトファクター最高値 “0.913”

先日、2005年度のGJ (Geochemical Journal) の impact factor が公表されましたが、0.913と創刊以来の最高値になったとのこと(これまでは2000年度の0.908が最高でした)。学会にとって大変うれしいニュースで、赤木編集長はじめ編集委員の皆さまの努力に感謝したいと思います。

なお、会員の皆様には、これからもGJの論文を引用してどんどん論文を書いていただくようお願いします。雑誌の impact factor が上がると、良い論文がさらに投稿され、さらに引用が増えるという、雑誌の質向上のプラスの相乗効果が期待できます。GJの impact factor が悲願の1を超えるよう、是非とも皆様の御協力をお願いします。

日本地球化学会会長 松田准一

2007年度女性科学者に明るい未来をの会「猿橋賞」候補者募集

以下のように、「女性科学者に明るい未来をの会」から猿橋賞の推薦依頼が届いております。学会推薦となりますので、書類をホームページからダウンロードして必要事項を記入の上、庶務幹事(大阪大学・植田千秋 shomu@geochem.jp)宛お送り下さい。

記

2007年度女性科学者に明るい未来をの会「猿橋賞」候補者募集

女性科学者に明るい未来をの会より、「猿橋賞」候補者の推薦を依頼します。下記のとおりで応募して下さい。募集内容、応募用紙などは下記ホームページからダウンロードが可能です。<http://www.saruhashi.net/>

- 1) 対象：推薦締切日に50才未満で、自然科学の分野で、顕著な研究業績を収めた女性科学者
- 2) 表彰内容：賞状、副賞として賞金30万円、毎年1件(1名)
- 3) 締切日：2006年11月30日
- 4) 応募方法：所定の用紙に受賞候補者の推薦対象となる研究題目、推薦理由(800字程度)、略歴、推薦者(個人または団体)、及び主な業績リストを記入して、主な論文別刷10編程度(2部ずつ、コピーも可)を添え、5)の送付先までお送り下さい。
- 5) 推薦書類送付先：
〒168-0071 杉並区高井戸西3-6-26

古在由秀方

女性科学者に明るい未来をの会

(封筒には、「猿橋賞推薦書類」と明記して下さい。書類は、猿橋賞選考のために選考委員会などで用いられます。書類は返却いたしませんのでご了承下さい)

高校の選択地学の内容の検討について

(日本地球惑星科学連合教育問題検討委員会から)

日本地球惑星科学連合の教育問題検討委員会では昨年7月に次期指導要領として物・化・生・地を含んだ高校1年の必修理科『教養理科(仮称)』を文部科学省へ提言しました。その後、それにつながる小・中の理科についてまとめ、先日の連合大会の一般公開セッションで紹介し、現在、文部科学省への提言に向けて準備を進めております。

そこで、次には、高校の選択地学の内容の検討に入ります。この内容は現在の地学を別の観点で見直して、大学とつながる新しい地学(科目名も検討する予定)の内容を考える予定です。現在の地学には地球化学の分野の内容はあまり入っておりませんが、環境問題や学問の進歩から見たとき、高校の選択地学にとって大変重要な分野となります。つきましては、各学会から見たとき、大学入学までに学んでおいて欲しい内容をあげるよう、教育問題検討委員会から求められております。

現在、学んでいる内容と検討委員である我々が考えた新たに取り入れるべき内容の案をたたき台として以下に示します。実際には高校1年必修理科の考え方が採用されるかどうかによって、高校のどの時期に学ぶかの問題はありますが、現在の高校地学に不足する地球化学的な内容に関する御意見をたくさん頂きたいと思っておりますので、宜しくお願い申し上げます。なお、日本地球惑星科学連合から指定されている締め切りは6月30日であり、すでにたたき台を提出した後ですが、皆様からのご意見は随時反映させたいと思っておりますので、気のついた点はいつでも検討委員までお寄せ下さい。

なお、9月の年会においても教育に関する課題講演(地球化学の立場からみた新しい科学教育)を設けておりますので、そちらへの積極的参加も是非お願い致します。

教育問題検討委員

瀧上 豊 (関東学園大学)

takigami.yutaka@nifty.com

津野 宏 (横浜国立大学)

tsuno@ynu.ac.jp

日本地球化学会からみた新しい内容の提案

- 1) 化学の学習にかかわらず、元素、同位体(安定同位体、放射性同位体)の基礎をしっかりとさえる。化学平衡の説明(発展的内容?)
- 2) 地球における元素の分布や分配(分配は発展的内容?)をあつかう。
- 3) 1)の応用として、炭素同位体、水素同位体、Sr同位体などをあつかい、プレートテクトニクスも考慮した地球上での物質循環を考える。(この部分は発展的な内容かもしれない)
- 4) 物質循環においては必要に応じて化学反応式を示し、定性的なことのみならず、定量的なことにもふれる。
- 5) 宇宙、太陽系、地球を結びつけるものとして隕石の化学をあつかう。

参考; 現在の内容(ただし教科書によって若干異なります。)

すべての生徒が履修すべき科目は基礎理科・理科総合A・理科総合B・物理・化学・生物・地学のうち2科目。そのうち基礎理科・理科総合A・理科総合Bのうちから少なくとも1科目以上を含む。

地球化学的分野

中学校

ある; 原子・分子(ただし構造には触れていない)、化学式、 SiO_2

ない; 原子模型、イオン、同位体、放射性同位体、火山ガス成分、隕石、超新星、ビッグバン、太陽風、環境問題用語

高等学校

理科総合A(物理+化学)

ある; 元素記号、同位体、放射性同位体(物質)、ウラン同位体、水素同位体、イオン、金属元素、海底資源、暮らしの中の身近な元素

理科総合B(生物+地学)

ある; 太陽・惑星・地球、地球の歴史、物質循環(炭素・窒素)、環境汚染、原始大気、オゾン層、酸性雨、温室効果

ない; 上の環境問題の説明に化学記号・化学式・化学反応式は少ない。イオン・同位体・放射性物質・核融合反応

地学 ;

ある; 熱流量、放射年代、鉱物、堆積岩、海水中のイオン存在量、放射性同位体の言葉や化学記号(Na^+ , Mg^{2+} , ^{238}U , ^{40}K , ^{14}C など)。火山、火成岩、鉱床、地球の歴史、環境問題、大気の構造、太陽などに化学的な内容や化学式(Al_2O_3 , CaCO_3 , SO_2 , H_2S など)

(注; 化学を取らない学生は基礎知識がないのですべて理解できるかどうか疑問)

地学 ;

ある; 宇宙の進化、水素、ヘリウム、地球史や環境問題における化学的な内容(酸素出現、オゾン層、酸素同位体)、pHの用語のみ

ない; “日本列島”の内容に提案(2)、(3)のような化学的観点からのものはない。星の進化での重元素合成(?教科書により異なる)

学会評議員会議事録

2006年度第1回

日時: 2006年2月18日(土) 13:00~17:00

場所: 東京大学・山上会館

出席者: 松田准一会長、蒲生俊敬副会長、赤木右、小畑元、中井俊一、平田岳史、益田晴恵、山本鋼志、植田千秋(以上幹事)、天川裕史、石橋純一郎、海老原充、河村公隆、千葉仁、角皆潤、永井尚生、張勁、日高洋、南雅代、村松康行、柳沢文孝(以上評議員)

1. 評議員名簿、各種委員会メンバーおよび引継ぎ事項の確認を行なった。
2. 報告事項
- 2.1 庶務(植田幹事):【科学研究費補助金】(文部科学省)平成17年度科学研究費補助金研究成果促進費

(研究成果公開促進費)「研究成果公開発表(B)」の実績報告書提出(10.13);平成18年度科学研究費補助金研究成果促進費「研究成果公開発表(B)」の申請書提出(11.10)(1,100千円,日本地球化学会公開講演会「深海底から地球の未来を求めて 掘削船「ちきゅう」が開く海底の世界」)(日本学術振興会)平成18年科学研究費補助金研究成果公開促進費「定期刊行物」(GJ)計画調書提出(6,576千円,11.12);平成17年度科学研究費補助金研究成果公開促進費「定期刊行物」の実績報告書提出(1.6)。【後援・共催等】(共催)プラズマ核融合学会,日本原子力学会「第6回核融合エネルギー連合講演会」(H18.6.13~14);日本原子力学会「第44回原子力総合シンポジウム」(H18.1.25)。【庶務その他】日産科学賞推薦(河村公隆会員,10.6);(株)国際文献印刷社との学会業務契約(10.10);J-Stage ChemPort 参加申請(10.14);日本学術会議協力学術研究団体申し込み(10.26);テラ学術図書出版とGJ(Vol.40)等に関する覚書(10.29);特許庁指定学術団体活動報告(12.4);1月末日を締め切りとし、「地球化学」への広告募集を行った(1.13);日本学術会議協力学術研究団体の変更届を提出(1.15);学会賞各賞・鳥居基金への推薦・応募状況(柴田賞1名,学会賞1名,奨励賞4名);鳥居基金(海外渡航3件,国内集会3件);「地球化学」への広告応募状況8件。【幹事会】2006年2月11日13:30~第1回評議員会の議事内容について整理した。(出席:松田・蒲生・赤木・小畑・中井・平田・益田・山本・植田の各幹事)

2.2 会計(小畑幹事):2005年の会計が閉じられていない旨報告があった。

2.3 編集

2.3.1 GJ(赤木幹事):【出版状況】Vol.39 No.5を10月下旬, No.6を12月中旬, Vol.40 No.1を2月中, No.2を3月中, No.3を5月中旬に配送予定である旨報告された。なお平成17年度には,101件の投稿があり,そのうち28件受理,34件却下,1件辞退,38件が審査中であること,平成18年には10件の投稿があった。【その他】J-Stageへの掲載作業の状況およびその費用に関する報告が行われた。2月上旬に自力搭載講習会が開かれ,3月中旬に公開の予定。GJ賞の受賞者が決定し,学会賞選考委員会に報告された(3~9参照)。

2.3.2 地球化学(益田幹事):【出版状況】40巻第1

号を3月に出版予定である(内容は原著論文1編,追悼文1編,受賞記念論文1編,博士論文抄録1編)。第2号は「炭酸塩の地球化学」特集号を予定しており,総説と原著論文9編が投稿され現在審査中である。2005年9月15日以降,1月30日までに投稿された論文は原著論文7編,総説10編,博士論文抄録1編。【編集委員会】編集委員長が蒲生俊敬から益田晴恵に交代した。これに伴い編集委員会委員が,五十嵐康人(気象研)/川幡穂高(東大海洋研)/沢田健(北大院理学研究科)/高橋嘉夫(広大院理学研究科)/角皆潤(北大院理学研究科)/三浦弥生(東大震研)の各氏に交代した。【その他】電子投稿できるように投稿規定を改定することを検討中である。

2.3.3 ニュース・HP(山本幹事):【出版状況】No.183は地球化学 Vol.39 No.4に綴じ込みで12月末に発行済みであり, No.184は3月発行の予定である。新しいニュース項目として,「院生による研究室紹介」「女性研究者に聞く」が掲載される。また日本地球惑星科学連合ニュース No.02を No.183に添付した。【その他】ニュースの電子メール版を随時送信した(2005 No.29~40,2006 No.1,2を旧システムで, No.3~18を国際文献印刷から配信)。地球化学会ホームページ・メールサーバを国際文献印刷に移行した(2006.1.13)。新ホームページの立ち上げは4月1日の予定でありホームページ改定を進めていること,年会受付システムも併せて製作中の旨報告があった。

2.4 行事(平田幹事):【2005年年会】(2005.9.26~28)琉球大学千原キャンパスで開催,参加者:308(名誉会員1人,正会員162人,学生会員38人,非会員47人,学生非会員105人)。口頭発表:177,ポスター発表:131。公開講演会「さんご礁が語る地球環境」(聴講者192名,そのうち高校生45%,一般35%,大学生20%)。【2006年年会】(永井評議員による報告)海洋研究所と日本大学の共催。会期:2006年9月13~20日の内3日間,会場:日本大学文理学部。公開講演会9月9日または10日に開催。第一回準備委員会を開催(2006.2.3)。【2006年度合同大会について】日本地球化学会のブースを設置し,広く宣伝を行う予定である。【Goldschmidt 2005】蒲生副会長,赤木幹事,平田幹事が参加し,GJ賞の授与を行う。また日本地球化学会のブースを設置し,広く宣伝を行う予定である。

- 2.5 各種委員会：【地球化学講座編集委員会】(松久委員長) 1, 3, 4, 5, 6巻が刊行済みであり2.7.8が未刊行である旨、報告があった。
- 2.6 「学術会議関係」：【研連報告】現在、約2,000人の連携会員を選考中とのこと、また、地球科学関係は日本地球惑星科学連合が窓口になりつつあり、学術会議ニュースもそこから配布されている旨、報告があった。
- 2.7 連絡会等：【地球惑星科学連合教育問題検討委員会】現在、教育課程小委員会と地学教育小委員会があるが、それに加えて教育養成小委員会ができること、教育特別公開セッションを来年度開催するとの報告があった。
- 2.8 海老原評議員より、放射化分析国際学会が2007年9月16~21日に、また国際隕石学会が2008年9月中旬に開催される旨報告があった。

3. 審議事項

- 3.1 名誉会員推薦委員会、将来計画委員会、地球惑星科学連合・教育問題検討委員会および男女共同参画推進委員会、ゴールドシュミット会議対応の新委員を承認した。
- 3.2 平成17年9月~平成18年1月の会員の異動について以下の異動を承認した。

会員異動(2005.9.1~2006.1.31)

議事録の訂正

昨年の第三回評議員会で会員数を下記の通り報告した。

	正会員	(一般)	(学生)	(シニア)	賛助会員	名誉会員	計	在外会員
2005.8.31	946	(818)	(105)	(23)	12	13	971	35

年会後に国際文献印刷から一人の学生会員の退会を2度カウントしていたという報告があった。

正しい会員数は下記ようになる。議事録を訂正する。

	正会員	(一般)	(学生)	(シニア)	賛助会員	名誉会員	計	在外会員
2005.8.31	947	(818)	(106)	(23)	12	13	972	35

【入会退会の承認】

【入会】

(10月)

一般会員

9282360 VALERIO, Rubens Antonio

AMC CONSULTORIA,
DEVELOPMENT, Brazil

9282364 GUPTA, Lallan Prasad

Institute of Geology and Geoinformation

9282366 WANG, Gehui

北海道大学低温科学研究所

学生会員

9282334 島田雄樹 シマダユウキ

九州大学大学院理学府凝縮系科学専攻

9282368 亀山宗彦 カメヤマソウヒコ

北海道大学大学院理学研究科惑星科学専攻

(11月)

学生会員

9282373 島村道代 シマムラミチヨ

北海道大学大学院地球環境科学研究科

(1月)

一般会員

9282375 井龍康文 イリュウヤスフミ

東北大学大学院理学研究科地学専攻

9282372 QING-ZHU YIN

Dept. Geology, UC Davis

学生会員

9282374 Fu, Ching-Chou

National Taiwan University,

Institute of Geosciences

9282376 大塚高弘 オオツカタカヒロ

大阪大学大学院理学研究科宇宙地球科学専攻

【退会】

(9月)

一般会員

281830 平田静子

(11月)

名誉会員

8280169 岩崎岩次 逝去

(12月)

一般会員

1280146 石橋 澄 1280436 大村明雄

1280715 山本雅弘 1281112 相原安津夫

1281491 川端一史 2281922 白崎俊浩

2282136 海老澤紀子 3280346 森岡正名

3280410 尾上健治 3281259 塚田祥文

6280583 田中邦也 6281043 坂田康一

6282086 高田健夫 7280014 青柳隆二

8280459 重川 守 8280620 谷崎良之

8281306	宇都浩三	9280292	松田敏彦
9280418	大崎 進	9281473	八木一行
4280059	古川征弘	280466	佐藤 修
学生会員			
8282242	川井 智		
(1月)			
一般会員			
280035	調枝勝幸		
賛助会員			
3281378	神戸学院大学図書館		
【除名】			
(9月)			
一般会員			
281829	田中伸幸	282011	遠藤政彦
1280306	三田村緒佐武	1281747	武井直子
1281769	佐々木建一	1282100	中野俊夫
2281966	中島 剛	3281958	佐藤雅規
5281653	根山敦史	5281772	浜原和広
5282050	高橋善幸	6281667	白石寛明
6282019	三浦典子	7281778	兎束直昭
8281027	忽那一也	8281607	池見洋明
9281666	岩元和正	4281962	JWA, YONG JOO
学生会員			
281744	小牧香織	281904	嶋田光雄
7282142	阿蘇敏文	9282160	奴賀義隆
9282201	工藤新吾	9282289	市川 豊
8282156	ACHY, GUILLAUME		
【変更】			
(10月)			
会員番号	会員名	変更前	変更後
5282298	岡崎裕典	学生会員	一般会員
9281859	加藤 研	学生会員	一般会員
(11月)			
会員番号	会員名	変更前	変更後
2282233	平原由香	学生会員	正会員
5280405	小倉紀雄	一般会員	シニア会員
7280188	梶原良道	一般会員	シニア会員
(12月)			
会員番号	会員名	変更前	変更後
282022	岡崎隆司	学生会員	一般会員
280091	半田暢彦	一般会員	シニア会員
1280094	樋口英雄	一般会員	シニア会員
1280243	倉沢 一	一般会員	シニア会員
2280406	小坂丈予	一般会員	シニア会員

2280439	大森禎子	一般会員	シニア会員
3280023	荒木 匡	一般会員	シニア会員
4280134	飯山敏道	一般会員	シニア会員
4280617	立川 涼	一般会員	シニア会員
5280245	黒田吉益	一般会員	シニア会員
5280278	前田 勝	一般会員	シニア会員
7280672	浦野隼臣	一般会員	シニア会員
9280634	角皆静男	一般会員	シニア会員
(1月)			

会員番号	会員名	変更前	変更後
2282329	石村豊穂	学生会員	一般会員
7282302	山下洋平	学生会員	一般会員
9282370	小岩嘉隆	学生会員	学生会員
			(修士パック)

2006年 1月31日現在の会員数

	正会員	(一般)	(学生)	(学生)	(シニア)	賛助会員	名誉会員	計	在外会員
			(学生)	(修士/バック)					
2006.1.31	907	(773)	(96)	(1)	(37)	11	12	930	37
2005.8.31	947	(818)	(106)		(23)	12	13	972	35
入会		5	5					10	4
退会		-24	-1			-1	-1	-27	
除名		-18	-7					-25	-2
変更	942	-8	-7	1	(14)				

3.3 国際文献委託業務に関する契約書を承認した。

去年の契約案に加えて、追加事項は個人情報保護のための項目およびバックナンバー販売の手数料に関する項目を付加した。

3.4 国際文献とのホームページ制作、大会受付システムに関する契約書を承認した。

3.5 GJ 出版に関するテラ出版との覚書を承認した。

3.6 科学研究費審査委員候補者名簿・推薦のための選挙、投票の結果：【固体地球化学】平田岳史（16票）、植田千秋（6票）、岩森光（5票）、高橋嘉夫・南雅代・松久幸敬・野津憲治・高橋和也（2票）。【大気水圏生物圏地球化学】益田晴恵（9票）、天川裕史（8票）、張勁（6票）、小畑元（4票）、田上英一郎、永井尚生、柳沢文孝（3票）という結果になった（敬称略）。得票数が同数の場合には若い人から推薦を行うこととした。

3.7 GJ の宣伝のため、掲載された非会員著者の論文の PDF を買い上げ、非会員に進呈することについて審議した。テラと相談の上、次回評議員会で再度審議する。

3.8 GJ 賞について：海老原受賞者選考委員長より

GJ 賞候補として Karin Brauer, Horst Kampf, Eckhard Faber, Ulrich Koch, Horst-Michael Nitzsche & Gerhard Strauch, 「Seismically triggered microbial methane production relating to the Vogtland- NW Bohemia earthquake swarm period 2000, Central Europe. *Geochemical Journal*, 39, 441-450 (2005)」が報告され、承認された。

3.9 所属機関への兼業届提出に伴う学会評議員、各種委員（編集委員）の委嘱状の発行に関して審議した。

3.10 会員の減少に対する対策が検討された。（検討内容：年会セッションの活性化、課題講演を外に開かれたものにする、課題講演で学会の特色を出す、関連学会会員の入会を促す、会員と非会員の格差を大きくする、学生会員向けの無料ショートコース開設、会計のシミュレーションの必要性、入会勧誘者を表彰または褒賞する、環境問題の基礎科学であることをアピール、予算獲得に効果的なセッションを開くなど）

4. 今後の評議員会・幹事会の予定

2006年度第2回幹事会：6月3日(土) 13時から
大阪市立大学・文化交流センター

2006年度第2回評議員会：6月10日(土) 13時から
学士会館分館（本郷）



研究会などのお知らせ

金沢大21世紀 COE シンポジウム「東アジアの大気環境汚染と健康・生態系への影響」

Atmospheric pollution of East Asia and its effects on ecosystem and human health

日時：2006年9月23日

場所：東京大学弥生講堂

HP URL: <http://earth.s.kanazawa-u.ac.jp/chronology/Air/homeJ.html>

詳しい情報は担当者（長谷部徳子，hasebe@kenroku.kanazawa-u.ac.jp）にお聞きください。

2006年度日本地球化学若手シンポジウム

今年度も日本地球化学若手シンポジウムを開催致します。

この会は本年度で5回目を迎え、前身の地球化学若手会から数えますと通算28回目となります。

若手研究者が分野を超えて活発に交流を行うことを目的に、地球化学全般（大気/降水、陸水、海洋、温泉/熱水、有機物、堆積物、岩石/地殻、地球外物質）の研究に従事する大学院生からPD・助手などの若手研究者が一堂に会し、研究発表や討論を行うものです。

近年は、ほぼ全国の地球化学分野の研究室からの参加を得、参加者数十人から百人近い規模で開催しています。

特に今年度は初の関西地方での開催です。多数の皆さんの参加をお待ちいたします。なお、本シンポジウムは2006年度第1回鳥居基金助成を頂き運営しております。

目的：地球化学に携わる若手研究者が分野を超えて活発に交流を行うことを目的とする

会期：2006年10/7(土)～10/9(月・祝)

会場：国立淡路青年の家

参加費：学生：5,000円（遠方からの参加者への旅費の補助を行う予定です。）

社会人：10,000円

申込み方法：

こちらの申込みフォーム

<http://wakatekai.hp.infoseek.co.jp/form.html>

を電子メールにコピー・ペーストし、内容を記入後 geochem_wakate06@yahoo.co.jp まで e-mail を送ってください

参加申し込み期間：7月20日(木)～8月31日(木)

（申込み多数の場合、早期に終了することがあります。）

問い合わせ先：

大塚高弘（阪大，D2）

totsuka@ess.sci.osaka-u.ac.jp

2006年度日本地球化学若手シンポジウム幹事

（ホームページ：<http://wakatekai.hp.infoseek.co.jp/>）

IGBP のコアプロジェクト

IGBP のコアプロジェクトである Surface Ocean-Lower Atmosphere Study (SOLAS) の活動の一環として SOLAS の FOCUS 1 から 3 までの実行計画書がそれぞれ完成しました。FOCUS 3 は SOLAS と

IMBER による海洋炭素循環に関する研究実行計画 (Joint SOLAS/IMBER Ocean Carbon Research Implementation Plan) です。

また, SOLAS News issue 3 (Spring 2006) が発行されました。いずれも日本語版ホームページにリンクしました。ダウンロードしていただけます。興味のある方は是非ご覧ください。

Implementation Plans:

FOCUS 1: Biogeochemical Interactions and Feedbacks between Ocean and Atmosphere

FOCUS 2: Exchange Processes at the Air-Sea Interface and Role of Transport and Transformation in Atmospheric and Oceanic Boundary Layers

FOCUS 3: Air-Sea Flux of CO₂ and Other Long-Lived Radiatively-Active Gases

SOLAS-Japan web page:

<http://solas.jp/jp/index.html>



人事公募

神戸大学理学部地球惑星科学科助教授・1名

1. 職名・人数: 助教授 1名
2. 所属: 地球惑星科学科・惑星科学講座
(<http://www.planet.sci.kobe-u.ac.jp/>参照)
3. 専門分野: 惑星物質科学
惑星物質を対象として, それらの起源・進化を明らかにする物質科学的・実験的研究。なお, 大学院自然科学研究科地球惑星システム科学専攻の21世紀COEプログラム「惑星系の起源と進化」(http://www.kobe-u.ac.jp/21COEPS/index_j.html参照)のサブグループ2(始原物質の起源と進化の研究)に主体的に参画・貢献できることが望ましい。
4. 職務内容: 理学部地球惑星科学科における教育・研究のほか, 全学共通教育ならびに大学院自然科学研究科博士課程前期課程(地球惑星科学専攻)および後期課程(地球惑星システム科学専攻)(<http://www.scitec.kobe-u.ac.jp/>参照)の教育・研究にも

携わっていただくこととなります。なお, 自然科学研究科は平成19年4月に改組され, 理学研究科が新設される予定です。

(<http://www.sci.kobe-u.ac.jp/introduction/gssci.html>参照)

5. 応募条件: 博士の学位取得者
6. 着任時期: 平成18年12月1日以降のできるだけ早い時期
7. 提出書類:
 - (1) 履歴書(連絡先に電子メールアドレスを明記してください)
 - (2) 研究業績目録(査読付原著論文とそれ以外に区別してください)
 - (3) 各種研究費獲得歴, 学会活動歴, 受賞歴
 - (4) これまでの研究経過・業績の内容(2,000字程度)
 - (5) 今後の教育・研究計画および抱負(1,000字程度)
 - (6) 応募者について意見が伺える方2名の氏名・所属と電子メールアドレス
 - (7) 主要論文(5編以内)の別刷またはコピー(研究業績目録に印を付けてください)
8. 応募締め切り: 平成18年8月31日(木) 必着
9. 応募書類送り先:
〒657 8501 神戸市灘区六甲台町1-1
神戸大学理学部地球惑星科学科
学科長 石橋克彦
(E-mail: ishi@kobe-u.ac.jp, Tel: 078 803 5731)
(応募書類は「地球惑星科学科助教授応募」と朱書した封筒に入れ, 簡易書留か宅配便でお送りください。なお, 応募書類は返却いたしません。)
10. 問い合わせ先:
〒657 8501 神戸市灘区六甲台町1-1
神戸大学理学部地球惑星科学科
留岡和重
(E-mail: tomeoka@kobe-u.ac.jp, Tel: 078 803 5743)

当学科の構成については, 学科ホームページ(<http://www.planet.sci.kobe-u.ac.jp/>)をご参照ください。

東京工業大学21世紀COEプログラム「地球:人の住む惑星ができるまで」21世紀COE教員・1名

1. 今回の公募の主旨
東京工業大学大学院の理工学研究科, 総合理工学

研究科，生命理工学研究科の3研究科の地球惑星科学・環境科学・生命科学の研究者16名からなる研究グループは，平成16年度21世紀 COE「革新的学術分野」に『地球：人の住む惑星ができるまで』という拠点形成プログラムを申請し，採択されました。この COE プログラムに基づき以下の21世紀 COE 教員（助手相当）を公募いたします。なお，本公募で採用される COE 教員は，上記 COE プログラムに基づく研究教育の他，フロンティア創造共同研究センターならびに大学院総合理工学研究科の研究教育スタッフの一員として関連する学生教育にも従事していただきます。

*21世紀 COE「地球：人の住む惑星ができるまで」他の情報については以下の URL をご参照下さい。

<http://coe21.geo.titech.ac.jp/>

<http://nylab.chemenv.titech.ac.jp/>

<http://www.titech.ac.jp/home.html>

2．専門分野：同位体環境化学分野

3．研究内容

a) 同位体生物地球化学：微生物の生合成・代謝系における分子種ごとの同位体分別，および分子内同位体分布

b) 同位体光化学：硫黄や酸素の光化学反応系における非質量依存同位体分別の理論と実験

上記のいずれかに関連する研究を5台の連続フロー型同位体比質量分析計，波長可変半導体レーザー計測システムや高分解能 FTIR が稼動する研究室で展開して，本プログラムの再現・解読・解析・理論や生命の各グループと密接に協力できる人材，異分野の融合により創設される新しいコースの学生教育に意欲を持つ人材を歓迎します。

4．応募資格

博士の学位を取得した者，あるいは，着任時までに博士の学位取得見込みの者

5．待遇・任用期間

単年度契約（非常勤職員）ですが，本人事に関しては COE 期間内（平成20年度まで）の更新・継続任用を予定しています。給与（年俸制）は常勤助手相当になります。なお，本プログラムの中間評価が3年度目（平成18年5月）に行われました。

6．着任時期：平成18年10月1日以降，決定後できるだけ早い時期

7．応募書類：

・履歴書

・業績目録（査読雑誌掲載「論文」と「国際会議発表」，および，それ以外の「総説等」に分けてください。また，重要とお考えのもの（主要論文）数編に 印を付けてください。）

・主要論文（3篇以内）の別刷（あるいはそのコピー）

・本研究プログラムに対する抱負並びに今後の研究計画（2,000字程度）

・研究資金（代表・分担）の獲得状況

・専門的な研究技術，実験装置などの経験

・推薦書2通もしくは1通

・推薦書1通の場合は，応募者に関する所見をうかがうことのできる1名の推薦者以外の方1名以上の氏名及び連絡先

8．応募書類の締切：平成18年9月8日(金) 必着

9．応募書類送付先ならびに問い合わせ先

〒226 8502 横浜市緑区長津田町4259 S2 17

東京工業大学大学院総合理工学研究科

21世紀 COE 教員（同位体環境化学分野）

選考委員会委員長 吉田尚弘

（東京工業大学フロンティア創造共同研究センター教授大学院総合理工学研究科併任）

（応募書類の封筒に「COE 教員（同位体環境化学分野）応募」と朱書してください。）

Tel : 045 924 5506 , 5142 , Fax : 045 924 5506 , 5143

E-mail : naoyoshi@depe.titech.ac.jp

（件名には「21 COE 人事」を頭につけて下さい）

東京大学大学院理学系研究科地球惑星科学専攻教授・

1名

1．募集人員 教授1名

2．所属講座 地球惑星システム科学講座

3．公募分野

地球惑星システム科学の視点から地球環境を研究する分野。当該講座の教員と協力して教育・研究を積極的に推進する人が望まれる。

4．着任時期 決定後出来るだけ早い時期。

5．提出書類

(a) 履歴書

(b) これまでの研究概要（1,600字程度）

(c) 研究論文リスト（査読論文とその他を区別してください）

(d) 主な原著論文の別刷またはコピー（5編以内）

(e) 今後の研究・教育の計画・抱負（1,600字程度）

(f) 自薦の場合は、応募者に関して御意見を頂ける方2名の氏名及び連絡先(住所、電話、電子メール)

(g) 他薦の場合は、推薦書の他に、前記事項(a)~(e)の概要がわかる書類

6. 応募締切 平成18年9月15日(金) 必着

7. 提出先

〒113 0033 東京都文京区本郷7 3 1
東京大学大学院理学系研究科地球惑星科学専攻長
宮本正道
Te : 03 5841 4543
E-mail : miyamoto@eps.s.u-tokyo.ac.jp

8. 問合せ先

〒113 0033 東京都文京区本郷7 3 1
東京大学大学院理学系研究科地球惑星科学専攻
多田隆治
Tel : 03 5841 4523
E-mail : ryuji@eps.s.u-tokyo.ac.jp

9. その他

封筒の表に「地球惑星システム科学講座教授公募書類在中」と朱書きし、簡易書留で送付してください。地球惑星システム科学講座の教員リストおよび研究概要など、詳しくは当専攻WEB:<http://www.eps.s.u-tokyo.ac.jp>をご覧ください。



院生による研究室紹介 No.3

東京大学大学院理学系研究科
地殻化学実験施設地球化学研究室
荒川 雅・吉野 徹

記念すべき連載第3回目は、東京大学大学院理学系研究科附属地殻化学実験施設・地球化学研究室の紹介を、修士1年の荒川、吉野がお送り致します。

地殻化学実験施設の教官は、化学専攻と地球惑星科学専攻の両専攻の教育に携わっています(そのため、大学院はどちらの専攻からでも受験できます)。化学専攻では、長尾教授の主宰する惑星化学研究室と、野津教授・鍵助教授の主宰する地球化学研究室が2つの研究室として属し、地球惑星科学専攻では、長尾研究室、野津研究室、森研究室が地球惑星システム科学グ

ループの中に属しています。しかし実質的には角森助手、角野助手、技術補佐員、事務補佐員を加えて、大講座的な運営を行っています。今回紹介するのは、野津教授、鍵助教授、森助教授が関わっている研究分野で、大学院生12名及び卒研生4名が指導を受けています(2006年6月現在)。他大学からの外部研究生(外部の大学で卒業研究をする学生:通称外研生)を積極的に受け入れており、現在の卒研生4名のうち2名はそれぞれ東京理科大学、北里大学の学生です。またその影響からか、大学院生のうち7割以上が他大学の学部を卒業した学生です。蛇足ながら、学生の約半数が女性であることを付け加えておきます。特に深い意味はありませんが……(「女子学生は昔はもっと多かったんだけどねえ、ハッハッハ」鍵助教授談)

我々の研究室では火山や地震に関連する化学現象の解明やマントルに匹敵する圧力条件での鉱物などの物理化学的な性質を探る研究を進めています。この様に多岐にわたるテーマを扱っているため、実際には火山ガス観測、地下水観測、室内実験の3チームにわかれて、互いに連携し合い研究を行っています。ここで、簡単ではありますがそれぞれの分野について紹介します。

火山ガス観測チームでは、日本各地の活火山に観測に行き、主に分光法を用いて火山ガスの組成やフラックスを遠隔測定しています。とは言うても、時には火口付近での測定もあるようでガスマスクは必需品とのことです。最近ではCCDカメラを用いてSO₂の放出挙動を可視化することに成功するなど、非常に独創的な研究が行われています(図1)。

また、地下水観測チームは大島や鎌倉など全国11ヶ所の観測点で地震予知の基礎研究という位置づけで、地下水の観測を行っています(図2)。最近ではデータ転送システムを独自に開発するなど、観測システムの高度化を推し進めています。また、着目する化学種も、これまでのラドンだけでなく多様化させ、それらの濃度変化と地震との関係を統計的手法で明らかにしていく試みを行なっています。ちなみに、鎌倉の観測点は海も近く、夏は有意義な観測ができると評判です。この他にも岩石破壊実験を行い、地下水の観測とは違う観点から地震の前兆現象にアプローチしている人もいます。

最後になりましたが、筆者が所属する室内実験チームでは、鉱物の高圧実験、表面観察、元素の酸化還元状態の分析などを行っています。鉱物の高圧実験とし



図1 北海道樽前山の噴気地帯にて（ガスマスクとヘルメットは必需品!!）



図2 大島観測点での一コマ

では、ダイヤモンドアンビルセルを用いた高圧下における含水無機化合物の構造変化の研究、マントル由来のダイヤモンドの中に存在する流体包有物の存在状態を探る研究、マントル捕獲岩中の二酸化炭素流体包有物からその岩石が持つ深さ起源情報を抽出する研究などが挙げられます。主に顕微ラマン分光装置、FT-IRなどの測定装置を使い、非常に幅広い研究活動を行っています。鉱物の表面観察は原子間力顕微鏡（AFM）や走査型近接場光学顕微鏡（SNOM）を使っています（図3）。AFMは液中でも測定可能なので結晶の溶解や成長の過程を原子レベルで観察できます。これまでには、希土類元素であるランタンを添加することで、カルサイトのステップに何らかの沈殿物が析出

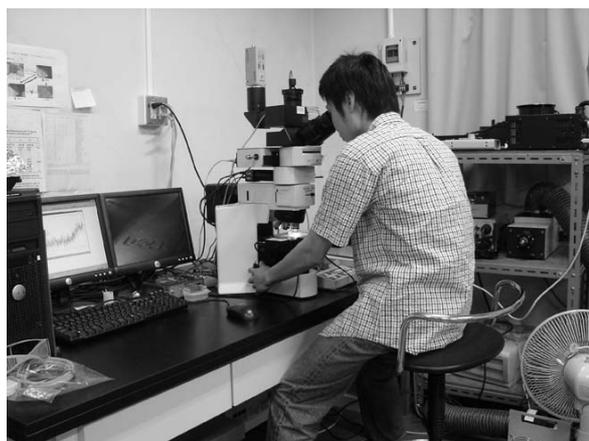


図3 室内実験の様子（顕微ラマン分光装置を扱うところ）

し、成長も溶解も止めてしまうことがわかりました。最近では生体鉱物を意識し、アミノ酸を添加した同様の系で実験を行っています（生体鉱物の研究のために金魚の飼育も始めました）。本研究室のSNOMはAFMを改造した自作品ですが、その性能は既製品と比べても遜色ないものです。SNOMは表面の凹凸像だけでなく、同時に数十nmオーダーの高空間分解能で蛍光スペクトルの測定ができ、その応用は地球化学のみならず材料科学など様々な分野で期待されています。この他、高エネルギー加速器研究機構でX線吸収微細構造（XAFS）の測定も継続的に行っています。

研究室全体の活動として、週に1回セミナーとミーティングを行なっています。セミナーは地殻化学実験施設のメンバー全員（図4）で行われ、多岐に渡る研究分野の発表を聴くことができ、たいへん刺激になります。また、ミーティングは実験の進み具合の報告や意見交換が行われる、貴重なコミュニケーションの場となっています。その他、興味を持った分野や研究に深く関連した分野について意欲的な学生同士で輪講を行うこともあります。

毎年7月には、化学専攻内の研究室対抗ソフトボール大会が開催されます。一昨年は練習の甲斐あり、準優勝の成績を修めることができました。今年は監督吉野、主将荒川という万全の布陣で優勝を目指し、この執筆の間にも激しいトレーニングを続けています（「まだまだ足りないよ、ハッハッハ」鍵助教授談）。この他レクリエーション的なものとして、春はキャンパス内での花見、夏は鎌倉での花火見物などを楽しんでいます。



図4 地殻化学実験施設の仲間達（最後列右から2番目が野津教授，最前列左から1番目が長尾教授，3列目右から3番目が鍵助教授，2列目左から2番目が吉野，2列目右から3番目が荒川）

長々とお付き合い有難うございました。二人で執筆したため，途中で文体が変わるなどの読み苦しい点が多々あったかと思いますが，どうかお許ください。紙面の都合上，本文中では紹介し切れなかった部分も多くあります。少しでも興味を持たれた方は，地殻化学実験施設のホームページ（<http://www.eqchem.s.u-tokyo.ac.jp/>）を是非ご覧ください。それではまたどこかでお会いしましょう。荒川，吉野でした。



女性研究者に聞く No.3

富山大学理学部生物圏環境科学科
環境化学計測講座
助教授 張 勁

「研究分野は？」

化学海洋学・環境地球化学。

地球システムの中での海洋循環の役割を理解し，化学分析を主な手法として，海洋の生物地球化学的成り立ちと，大気・生物圏・地殻との相互作用を通して，海洋環境における物質の挙動や循環を研究しています。さらに温暖化等の地球環境問題を通して，人間と

海洋環境の関係についても考察したいと思っています。具体的に，生物・物理・地質分野などと学際的な連携を図りながら，微量成分と同位体組成等を用い，沿岸海底湧水系，及び大陸起源物質輸送の実態の解明や，日本海など縁辺海における海水・物質循環機構の研究などに取り組んでいます。

「家族は？」

夫と二人です。それぞれの名字を替えるのが面倒くさくて，夫婦別姓になっています。ちなみに住民票には，後から移り住んできた夫が“夫（未届け）”と標記されています。

「アカデミックな道に進もうと思ったきっかけは？」

自然の成り行きです。小学校に入っすぐ，毛沢東の文化大革命に終止符が打たれ，鄧小平の“文化第一”の時代に突入しました。あらゆる教科でコンテストが盛んになり，飛び級制度も導入され，とにかく子供ながらも“競争+競争”の毎日でした。何しろ，中国では大学進学までの道のりは険しく，当時の進学率は小学校から中学校が9割，高校へはその7割，大学へはさらにその3%位でした。

勉強が余り好きでない私の大学受験は，結局，第一希望である情報科学系（父が勤務する大学）の合格ラインに4点足らず，国の“服従分配”により2,000 km

も離れた東北大学鉱物専攻に行かざるを得ませんでした。いやいや入学したものの、結局これが生涯付き合っていくフィールドサインスとの出会いとなりました。

「博士に進むときの家族の反応は？」

そう言えば、私の大学生活は生後10日目からです。大学教員である両親（古希を過ぎてても現役です）には、大学の敷地内に宿舎が割り当てられていました。ですから、私にとっての大学はお家であり、子供の時に“股の割れたパンツ”を履いてグランドでウロウロするのが当然のように、後に大学へ進学することも当たり前のことだと言われていました。海に憧れて日本に渡って留学する時も、修士課程へ進む時も、両親からはエールを貰っていました。ただ、博士課程へも...！と言い出した時には、“売れ残りに気をつけてね”と、父に言われた記憶があります。{中国では(日本も?)高学歴が嫁入り道具にはならないからでしょう。}結局、両親は研究者として、私のやりたいことを理解してくれており、現在も応援し続けています。

「研究の中で印象に残るできごとは？」

南洋への初航海で、生まれて初めて南十字星を見たとき。寒さに凍えながら、アッパーデッキでオーロラを眺めたとき。シロクマを警戒しつつ、北極の海氷を採掘したとき。北海道西方沖で「しんかい6500」のぞき窓から、1 km 四方もの海底一面に輝くバクテリアマットが目飛び込んできたとき。円石藻に支配され、熱帯珊瑚礁の海のようなエメラルド色に染まったベーリング海をクルーズしたとき。ポンペを背負って、数十メートルの海底で、シロギスと争って淡水を口にしたとき。富山湾海底の崖で、大口を開けて笑うオオグチボヤの群れに出会ったとき。

全てフィールドでの話になってしまいましたが、私にとっての研究は“未知との遭遇”で、いつも新たな出会いにドキドキ、ウキウキです。

「女性ゆえに損(あるいは得)をしていると感じることがありますか？」

はい。損得半々と言ったところでしょうか。自分では普通の振る舞いをしているつもりでも、“よくやるね!”と言われたり、“出しゃばりだな!”と思われたりすることは良くあるようです。何故か、“女のくせに、こんなこともできないのか”と言われた記憶は

ありません。まあ、単に、聞こえてないだけかも知れません.....。

「後輩に一言(女性研究者へのすすめ)」

未だに自分が若手だと思っているのに、“後輩に”と言われても.....。

しかしこの夏、自分で手がけた15人(05人は中国蘭州大学との共同指導)の博士が巣立って行きます。彼女達に贈る言葉として、自分の好きなことを職業としている人は、世の中そんなに多くはありません。

また、日本の社会においても、男女の差が少なくなりました。いつの間にか、研究船にも女性専用トイレ・風呂が整備され、学会会場に託児所ができ、特に子育てしている女性研究者に、研究費の面でも優遇措置がとられる世の中が変わってきました。若手女性研究者の皆さんの、更なるご活躍に期待しましょう。



書評

『太陽系の化学 地球の成り立ちを理解するために』
著者：海老原 充
出版：裳華房 2006年5月発行 定価：3,200円
ISBN 4 7853 3217 4

本書は、非化学系をも含む理科系の大学・高専の学生を対象とした、裳華房の「化学新シリーズ」の第17冊目として刊行されたものである。このシリーズには、一國雅巳著「基礎無機化学」、小倉・一國著「環境化学」、赤岩英夫著「機器分析入門」が含まれている、といえれば読者の皆さんには本書の外観が目につかぶに違いない。地球化学会の会員が執筆されたこれら先輩3冊は、化学書として化学を越えた広範な読者の興味を惹いているが、本書には、それに加え、非化学書として化学の世界に切り込める1冊ではないかとの期待が掛けられる。

本書は、化学、中でも核化学や放射化学を基礎として、太陽系や地球を含む惑星の地球化学を述べた入門書である。入門書といっても一般教養教育には少し難しそうで、地学や化学の入門課程を終えた学部専門教育の入門書に最適と思える。全8章に細かく章立てがなされており、1章1~2時間(コマ)の講義テキスト

トとしても巧く構成がなされている。第1章では、宇宙化学や地球化学の土台となる原子や同位体に関連する基礎的な事項がまとめられている。核化学や放射化学が開講されていない教室でも、これで十分な基礎知識が得られる。第2章は、太陽系の元素の起源、第3章は、太陽系の元素組成について述べられている。ここでは、著者がシカゴ大学留学をとおして研究してきた内容が「どのようにして太陽系の元素組成を求めるのか？」などいくつかの節にまたがり、その歴史的経緯を含めて、物語風の流れをもって平易に解説されている。著者ならではの内容である。第4章は、かの凝縮モデルの解説とその合理性について、第5章は、その集合体としての隕石の成り立ちについて、元素や同位体とその鉱物や組織からの情報をふくめて述べられている。第6章は太陽系の同位体存在度の章であるが、述べられているのは隕石だけでなく地球上の物質を含めた様々な環境での同位体変動とその原因についてである。これは著者がIUPAC(国際純正・応用化学連合)無機化学部門の「原子量および同位体存在度委員会」委員として世界の同位体変動に関する研究を精査・評価し、原子量の改訂作業に力を注いで来た事(地球化学32巻107-114, 1998)と無縁ではなからう。評者は、二十年後の地球化学は、希土類元素を含む多元素のあらゆる反応場での同位体変動(分別)測定とそのシステムテイクス解析が学問分野の中心の一つに

なるのではなからうか、と考えている。この章は、その萌芽のように思えてくる。第7章は太陽系の年代学、第8章は太陽系惑星の化学である。

一昨年あるところから出版された大著「METEORITES」に「A Petrologic, Chemical and Isotopic Synthesis」の副題が付いていたので、大いに期待して購入したものの、その「記載化学?」中心の内容にっかりした記憶がある。本書の優れた点は、単なる結果を記述したものでなく、「なぜそう考えられるようになったか」について一段と掘り下げた考察がストーリーとしての流れの中でなされているところにある。また、章ごとに演習問題がのせられているのも便利である。ただその中には、来月の学期末試験に使いたいと思うのもあれば、うーんと考えて解答出来ないものもある。(ご安心:巻末に解答と解説が付いている)

宇宙化学を専門に研究されている読者には、著者の専門(太陽系の元素存在度や同位体変動)を楽しむ書あるいは学生さんへの教科書/参考書として、広く地球科学を研究されている読者には、宇宙化学や地球化学から見た、太陽系と地球の姿を見ていただく書として、そして化学を専攻されている読者には、最先端の「物質化学」に加えて「時間と空間の化学」の楽しさを感じていただく一冊として、推薦したい。

(名古屋大学大学院環境学研究科・田中 剛)

ニュースへ記事やご意見をお寄せください

地球化学に関連した研究集会，シンポジウムの案内，人事公募，書評，研究機関の紹介などの原稿をお待ちしております。編集の都合上，電子メール，フロッピー（マックもしくは Dos/V いずれでも結構です）での原稿を歓迎いたしますので，ご協力の程よろしくお願いいたします。次号の発行は2006年12月はじめを予定しています。ニュース原稿は10月末までにお送りいただくよう，お願いいたします。また，ホームページに関するご意見もお寄せください。

編集担当者

山本鋼志

〒464 8602 名古屋市千種区不老町
名古屋大学大学院環境学研究科
（理学部気付）

Tel/Fax : 052 789 2522

E-mail: news-info@geochem.jp

南 雅代

〒464 8602 名古屋市千種区不老町
名古屋大学年代測定総合研究センター

Tel : 052 789 3091

E-mail: new-info@geochem.jp